

リレートーク

農業・農村の再生と 協同労働への期待

小橋 暢之（株式会社パストラル）



先ほど石見先生が産業組合法ができて100年になるということで、語りたい何人かの人がいるとおっしゃいましたが、その人たちはほとんど産業組合中央会にいた人たちで私たちの先輩でもあります。私が居りました全国農業協同組合中央会は戦後、産業組合中央会を継承して運動を続けてきたところでもあります。

この100年を前半と後半に分けて見ますと、前半の50年間はある意味で農業が非常に発展した50年間でした。重労働で歳をとると腰の曲がったおじいさん・おばあさんがいっぱいいたりして、たいへんでしたが日本の農業は1950年までは世界で一番を誇っていただろうし、もちろんアジアでは最先端を行って輸出もしていました。その後の50年は衰退と崩壊の50年でした。農業の曲がり角と言われたのが1950年代の終わり、日本農業の憲法として制定された旧農業基本法は、1961年です。この頃から高度成長が始まるのですが、その時の統計でさえ我が国の食糧自給率は79%、驚くべき自給率です。それが2000年を迎えてわずか40%しか自給できないという先進国最低の食糧不足国となったわけです。日本の農業を食べ物から見るとほとんどの農作物を外国から輸入していて、重さでいうと2000万トン、カロリーでいうと60%の食糧を外国から輸入しています。これを農地に換算しますと

1,200万haの農地を借りていることになります。日本の農地が500万ha、海外で借りている農地と国内農地を分母として国内農地を割り戻すと27%、日本の本当の自給率は27%くらいしかないと考えてもいいでしょう。

なぜそうなっているのに危機だと感じないのか、食料は私たちの食卓に溢れているし、コンビニもあり、飽食の時代で危機を感じない。また作っている農家も危機を感じない、なぜかというところ4割の自給というのもカロリーで計算したもので、お金の換算しますと7割を自給していることになります。国外から安い穀物を輸入し国内で牛肉を作ったりしますと牛肉は国産となります。現在農業所得は一戸当たり144万しか入りませんからとても食べてはいけませんが、その代わり農家の人たちはいろいろなところに働きに出てサラリーマンとしての収入を得ています。都市のサラリーマン世帯よりも、世帯としては上回る所得を形成している。生産者と消費者の双方が危機の実感を持っていません。

自給率はおそらく毎年1%ずつ下がって、おそらく自給率3割という時代がそう遠くないうちに来るだろう。これを作っている人から見るとどうなるかというところ1960年の時には1,200万人の農業者がいました。現在350万人くらいに減っています。減っただけならいいのですが、若い人が農業を継ぎません。

新規学卒就農者が毎年2,000人しかいません。大きな企業1社で2,000人、3,000人就職する時代にです。残っている人でやっていきますから当然高齢化します。日本全体が世界でもまれにみる超高齢社会にやがて突入しますが、1960年には農業で働いている人の平均年齢44歳でしたが、現在は63%が60歳以上で、おそらく数年で65歳以上が全農業者の50%を超えるだろう、農業協同組合はもうすでに高齢協同組合です。皆さんのように高齢協同です（笑い）。いや笑い事ではなく、全国平均で言っていますが、鳥根・鳥取・高知は日本最高の農村高齢地帯です。60歳以上の方が60%を越える市町村があるんです。この人たちもいずれ現場からリタイアする時期がきます。

1960年代、日本に600万haの農地がありました。現在は490万ha。道路や工場地や住宅地になって国民の豊かさを作ってきました。その分農業は身を削るようになってやせ細ってきました。高齢者がリタイアして農業をしなくなる。山間地に行く耕作放棄地（2年間以上作付けしなかった土地）が増えて、2010年までに100万ha位になるだろうと言われていきます。そうすると耕作面積は400万を切って395万haが予測されます。そこまでいけば日本の農地では国民の食料をどんなにいざという時がきても供給できなくなると思っています。現在でも無理ですが、肉を食べないで穀物と芋だけ作ればなんとか生きて行かれますが、それでも300万台の数字になったら無理かなと思います。

作物や家畜も随分変わりました。かつては養蚕が盛んでした。しかし、もう滅びたと言ってもいいくらいです。かつて日本の産業を支えていたのは養蚕とお茶とみかんです。養蚕がだめになり山間地が荒廃し、1960年代以降自由化が進んで最初に見捨てられたのが小麦です。いま小麦の自給率は7、8%しかあ

りません。次が大豆です。自給率が3%ですから97%が海外です。これも遺伝子組み換え大豆がたくさん作られるという深刻な状況になってきました。

今まで輸入に頼って何とかきましたが、80年代以降変わってきました。中国、台湾、ニュージーランド、オーストラリアなどから生鮮食料品を輸入するようになりました。60年代は牛肉も果実も野菜も70~80%の自給率でしたが50%を切りました。いま心配になっているのはネギ、しいたけです。最後に農家らしい農家が残ったのは野菜だけで、野菜は最後の砦です。新鮮さが大事だから遠くから運んで来れないという野菜でさえ、今は冷蔵技術が発達して遠くから運んでくる。21世紀を目前にして日本の農業は風前の灯火のようだといえます。

こういう中で新しい基本法ができましたが、状況は厳しくなる一方です。国際的にはWTO交渉をしています。昨年シアトルへ行って交渉してきましたが、WTOの交渉がさらに世界的に農産物の自由化を決定するという事になれば打撃を受けるということになります。こういう中で、21世紀をどう展望するかということが課題です。

もし、新しい方法が見いだせるとすればこんなことではないかということをご紹介します。皆さんとの接点があればいいなと思います。

一つは輸入に対抗するためには協同ということをもう一度追求しなければならぬ。農村では協同は珍しいことではなく、かつてはやってきました。最初は資本の協同で信用組合です。そして労働の協同化、機械の協同化も進めてきました。一番難しいのは土地の協同化で、これからは集落農場型の農場を協同でやっていかなければならぬ。50haくらいの規模になれば自由化に対抗できるだろうと思います。

第2は、安全で安心な営農に転換することです。例えば日本の水田に化学肥料をいっさい投入しなければ、3割収量が落ちるといわれていますが、ちょうど3割減反ですから化学肥料をやめて全部の田んぼを使ってもいいということになります。

第3は、都市と農村の交流です。これから私たちは、連合の皆さんと故郷回帰100万人運動を始めようとしています。いずれ団塊の世代が定年を迎えてきますが、彼らの多くが田舎に帰りたいと思っている。その帰る場を作って農村の発展のためにやってもらいたい。とくに都市で培った技術など、例えばパンを焼いてもらったり農産加工や民宿をやってもら

ったりという、資本の協同でカントリービジネスをおこしてもらおう。

第4は、生産者と消費者が一つの協同組合を作ることが必要です。例えば牛を飼って、同じ組合員が解体して食べるという、生産者と消費者と一緒に協同組合をつくる。ナショナルラントという協同組合がイギリスにありますが、これなどその例です。協同組合法を改正してもう一度産業組合法を作らなければという時代が来るかもしれません。

そういうことが新しい21世紀の農業をぶり返していく切り口になるのではと思っております。皆さんのお知恵やお力を借りながら農業の再生の道をつくりたいと思います。

参加者の感想文より

安藤るり子さん（介護福祉士）

リレートーク：各々説得力ある活動報告、ありがとうございました。

宅老所の活動をしたいと考えており方法（人的、運営面）を探っています。現在の活動中の方のお話から徐々に具体的イメージ方法を取り入れていきたいと思えます。

伊藤松博さん（たまゆら）

リレートーク：それぞれの発言者が活動の中でいろいろな思想との闘いをし、自分を高められていることをとても感じました。

黒坂孝子さん（山形県高齢者福祉生活協同組合）

リレートーク：小菅恵子さんのお話を聞くのは今回で2回目、偉いと思います。恒川敏江・芳克さん、生ゴミリサイクル。私どもの市でも試験的に生ゴミリサイクルをやっておりますが、生ゴミの収集は業者に下請けさせて使っていない市の牧場に仮の施設を作ってしております。全て市の費用でやっており出来た堆肥は売りもせず、生ゴミを出している家庭に配布もせず山積みになっているようです。

江田竜也さん（一般）

リレートーク：色々な方々のやっていること、取り組んでいること、自分の知らない部分など参考になった。寒

かった。照明はステージだけの方が目が向くと思う。

中川太一さん（兵庫県高齢協）

リレートーク：協同労働につながる動きが各地で芽生えていることを感じた。草の根の経済学についてもっと勉強してみたい。

内藤明子さん（センター事業団京都）

記念講演：協同組合という働き方は世界にも共通するものであり、また歴史深く突き詰めればもっともっと奥が深いもののように感じた。私たちが生きる現在もその組織が創られているその歴史の上に立っているんだと思う。リレートーク：それぞれ教育や環境問題、福祉など分野はちがっても全てが共通して「協同労働」をもとめていることに驚いた。特に生ゴミリサイクル活動の報告を聞いて、身近な素朴な思いからゴミ問題に取組、そこから肥料作り、野菜づくりに障害者や高齢者、果てにはそれで収穫できた野菜を学校給食に使うことで子供たちにとたくさんの人たちを巻き込んで、その先には市全体のゴミ回収をするまでに地域を巻き込んでいくという。自然でありながら壮大な構想にすばらしい思い、これこそが協同労働とおもった。無理やり頭に理念を叩き込んでそれに向けて活動するのではなく、自然に心から発想する力をもちたい。